

龍谷大学世界仏教文化研究センター

2016 年度学術講演会

講演名	“エンゲイジド・ブディズム”を越えて
開催日時	2017年3月2日(木) 13:00~14:30
場所	龍谷大学大宮学舎西翼 2階大会議室
講演者	金澤豊氏(龍谷大学世界仏教文化研究センター博士研究員)
司会	唐澤太輔氏(龍谷大学世界仏教文化研究センター博士研究員)
主催	龍谷大学仏教文化研究所
共催	龍谷大学世界仏教文化研究センター
参加人数	7人

【講義のポイント】

発表者は「仏教者による苦への理解、苦の解決に向けた行動」として知られる「エンゲイジド・ブディズム」のうち、東日本大震災復興支援に焦点を当てた。そこから日本における「エンゲイジド・ブディズム」が、2011年以降どのように変化を遂げてきているのか紹介するものであった。発表者自身に取り組んでいる活動の事例と、その活動の支えとなるインド仏教經典の文言が紹介され、既存のエンゲイジド・ブディズムを超えた視点が提示された。

【講義の概要】

■ はじめに

アジアの仏教諸国を対象としたエンゲイジド・ブディズム研究は近年進展し、その対象範囲を拡大し続けている。エンゲイジド・ブディズムは、それぞれの地域時代において、仏教者が世俗社会とどのように関わるかを研究対象とするもので、日本では中核的な理念として他者の「苦」への理解が根本にあり「苦」の解決に向けた行動であることが明らかにされてきた(阿満利磨『社会を作る仏教 エンゲイジド・ブディズム』2003年, p.29)。周知の通り、仏教は6世紀にインドから中国、朝鮮半島を経て日本に伝来した。以来、1400年余りの日本仏教史上において、社会の苦悩に参画する僧侶は多く知られている。例えば、8世紀頃シルクロードの終着点である東大寺毘盧遮那仏造像のための勧進や治水事業を手がけた行基、13世紀、貧民救済事業を進めた叡尊、忍性という人物があげられる。それだけでなく、近年は、仏教教団を母体とするNGOの活躍から、日本の社会参加仏教はトランスナショナル化しているという特徴も示されてきた(ランジャンナ・ムコパディヤーヤ「社会参加と仏教」2011年, p.167)。しかし、これまでの仏教者による社会参画や「エンゲイジド・ブディズム」の名の下に包括されてきた活動は、2011年3月11日の東日本大震災を境に、様相を変えたように思われると発表者は指摘した。

■ 仏教者への期待

阪神・淡路大震災以降、災害ボランティアにおける仏教者の役割は不明確だが、メディア・報道における存在感には変化が見られる。「なぜあの人が死んで、自分が生き残ったのか」という医療者には対応が難しいとされる。いわゆるグリーフケアという、被災者の心のケアの必要性が高まり宗教者の担い手に期待が高まっている。例えばパストラルケアをモデルとした日本型チャプレン「臨床宗教師」の養成や、仮設住宅へ直接訪問し、傾聴活動をする僧侶のグループなどである。

■ 仏教者の役割

そもそも、仏教聖典を注意深く見ると人として生まれてきた以上、苦悩から逃れられない事を明らかにされたことを発表者は指摘する（四諦）。つまり、苦悩が人生の根底に横たわっているという事をすでに知らされている仏教徒であるから「苦悩を見据えることは仏教のあり方そのもの」で、苦悩を抱える遺族の存在のあるところに仏教者が関わらない理由はない旨を原始仏典、大乘経典を引用しながら説明した。

現在の震災復興支援に関わる仏教者の活動は、どのように評価されても良いが、既存のエンゲイジド・ブディズムを越える視点として、①なんでもエンゲイジド・ブディズムに括られるものではないこと。②宗教的なものの見方が提供できるか、③支援者が自身の精神的背景に自覚的であるか、④無力感と誇大感の中道を歩む意識が提示された。

【まとめ】

「エンゲイジド・ブディズム」は、社会のニーズに応じて参画する仏教だけではなく、仏教の教えがあって社会に参画する性格のものでもないという。止むに止まれぬ行動の中で見えてくる仏の教えを噛みしめることであり、自らを支える存在（経典の文言）と新たに出会い直す。このような仏教聖典と再会する仏教徒の側面に注目が集まっても良いと考えると締めくくり、今後の研究が期待される講演であった。

以上

【文責】 龍谷大学世界仏教文化研究センター博士研究員 唐澤太輔